

指先白々ツト



◆ ◆ ◆
駅を出ると、空から赤い雪が降っていた。週末午後六時の小さな魔法。それはなんだか、まるで世界の終わりを告げているようだった。

冬は終わりに近づき、太陽が顔を出している時間は徐々に伸びていた。雲間から覗く夕日が、雪を赤く染めていた。ちらちらと落ちてくる赤い雪片。私はその中を、長いマフラーに顔をうずめて歩いていった。日中は暖かくなってきたとは言え、日が落ちてくるにつれて気温はぐっと下がる。時折吹く風が、私から体温を奪っていった。

駅から二十分ほど歩けば、自宅につく。途中、境川という小さな川があり、その川沿いを私は音楽を聴きながら南下していく。流行りの音楽は好まない。メジャーと言うよりはインディーズの音楽を私は好んで聴いている。安物のイヤホンからは、じゃかじゃかと騒がしい音楽が流れる。その音に身を委ねていれば、日常の嫌なことを考えずに済むから、私は聴覚に神経を集中させる。たまに目を瞑ってみたり、歩きながらリズムを刻んでみたり。私は、私だけの世界に埋没していく。現実から乖離していく気分を味わう。

曲が終わって、次の曲が流れ出すまでの間、私はふと立ち止まって空を見上げた。雲がまた曲が始まり、私も歩き出す。
気まぐれに落としただけだったのか、雪はすでに止んでいて、辺りは濃い董色に包まれていた。赤い雪はもう降っていない。世界の終わりも、まだ、私の元にはやってこない。雪を降らせていた雲は千切れ、風に乗って流されていく。東の空にはいくつかの星が瞬いていた。

また曲が始まり、私も歩き出す。
川沿いの道は狭い。車がすれ違うのも苦労するような道だ。右手に川があり、そのすぐそばをこの道は通っている。川はコンクリートで補強されているが、きちんと生きている土が周りがある。だから近所の人はその土を利用して、小さな畑として利用している。一メートル四方の畑が点々と現れては消える。花壇にしているところもある。私はこの風景がなんだか好きで、春にはよく散歩をしている。

私がぼんやりと川を見ながら歩いていると、携帯電話が震えた。画面を見ると、今つき合っている彼からの電話だった。私はぶるぶる震えている携帯電話に嫌悪感を抱いて、今すぐ川に投げてしまいたい衝動に駆られた。はつきり言って、今の私たちの心は離ればなれになっている。私も彼も、とても遠いところにいる。私は電話を無視して、携帯電話を鞆にしまう。しぶとく電話してくるかと思っただが、案外あっさり切れてしまった。もう

すぐ、私たちは終わりなのだという予感を、彼も感じているのだろう。仮にここで私が電話に出たとしても、どうせ喧嘩して終わってしまうだけだ。私は前を見て歩く。ここには留まりたくなかった。

川沿いに立つ小さなアパートが見えてきた。私の住む家。無骨なコンクリートでできた私の住処。目の前には公園があつて、休日は子供の笑い声が聞こえる。近くには幼稚園もあつて、子供のいる家族にとつては住みやすいところなのかもしれない。綺麗な都会というわけではなく、しかしのんびりした田舎というわけでもなく、そこここによくある平凡な住宅街。大型量販店はないけれど、小さなお店は充実している、そんな街。

歩いているうちに日は落ち、辺りは暗くなっていた。街灯が小さな道を照らしている。ぼつぼつぼつ、と。楕円形の灯りの下をくぐり抜けて、ようやく自宅に辿りついた。味気ないドアに鍵をさし込んで、回す。鍵が開く冷たい音がする。私はいつもこの音に、孤独を感じる。

「ただいま」

返事をするのは、冷蔵庫の駆動音だけだ。暗くなった部屋の中に、温かいものなんてなにもない。溜息をついて、部屋の電灯をつける。一瞬で明るくなる室内。窓際に置いてい

るサポテンはどことなく元気がないように見える。聞いた話だが、植物にも心というものがあつて、人間と同じように喜怒哀楽の感情を持っているらしい。私がいつも疲れた顔をしていると、サポテンもきつと気が滅入ってしまうのかもしれない。誰も私を励ましてはくれない。

私は携帯電話の入った鞆をベッドに放り投げて、テレビをつける。テレビからは名前も知らない芸人が、誰かの笑いを取ろうと必死だった。今ならきつと、私の失笑なら安く買えるはずだ。そう教えてあげたいけれど、テレビの中と私は完全に隔絶されている。彼との関係も、今はこんな感じなのだろうか。ここに温度はない。

暖房をつけて、きついスーツを脱いで部屋着に着替える。服というのは人の気分をも支配する力があると思う。スーツを着ている時は、固い私。それは表情にも出るし、心もそうなってしまう。一種の鎧。それを脱ぎ捨てれば、私は素に戻る。

冷蔵庫からビールとつまみを取ってくる。もうなにかを作る気にもなれないので、今夜の食事はこれで済ませてしまう。太りそうだけど。

お笑い番組を観ながらビール片手につまみを食べる女。自分のことながら、溜息しか出てこない。子供の頃に憧れていた大人の女性というものに、私は年齢だけは追いついて、

追い越して、そうしてこれからも生きていく。夢なんてなかった。ただ幸せになりたかった。ささやかなしあわせ。ちよつとしたいのり。はかないゆめのあと。つまらないへいぼん。つづいていくいのち。

私は私に失望して、それでもそれを變える力なんてなくて、結局、現状に打ちのめされ妥協して、日々を重ねる。

◆ ◆ ◆
そうして私は、冷たいベッドの中で、今日も一人、静かに眠る。

休日はいつも彼と会う約束になっている。私は疲れた身体を引き摺って、待ち合わせ場所の喫茶店に入る。駅前にある小さな喫茶店。近くには有名なファーストフード店が多いので、この喫茶店の客入りは芳しくない。だからこそ落ちつくお店になっているのだけど、

時折、店長さんが食べていけるのか不安になる。

私はお店の中で唯一ある大きな窓に近い席に座る。コーヒーを頼んで、なんとはなしに外を眺める。もうすぐお昼という時間帯だが、駅前にそれほど人は多くない。最近はお店周辺の開発を進めていて、通りは近代的な造りになっているし、お店も色々と入ってきているが、それにしても質素な駅である。

ふわりと、コーヒーの香りが鼻孔をくすぐる。

「おまちとおさま」

店長がコーヒーを持ってきた。私はありがとう、と小さく答えて、受け取る。続けて店長はすつと、手を伸ばしてきた。その手のひらには、ミルクの入った小瓶が乗っていた。店長はなにと言わずにじつとしていて、その目はなんだか、石像のようだった。私は甘いコーヒーが好きなので、それも受け取る。店長は髭をたくわえた口で、にかつと笑い、カウンターに戻っていく。

小瓶からミルクを垂らし、かちやかちやと混ぜる。甘い匂いが立ち上ってくる。

私はその香りを楽しんでみると、かるん、とお店のドアベルがひかえめに鳴った。そちらに目を向けると、彼が入ってきていた。きよろきよろと店内を見渡して、私を見つけて

こちらに歩いてきた。私はずつ、とコーヒーを啜る。

向かいの椅子に座る時、彼の長い髪がゆらりとうねった。私はそれを眺めて、なんだか心がぎゅっと締めつけられた。蛇のような、黒い、髪。

「なんで電話に出ないんですか」と椅子に座りながら彼は言う。「何度も電話したのに」

「忙しかったから」

会って早々、私たちは喧嘩腰の会話を始めた。

「僕だって忙しいですよ。それはお互いさまでしょう」

私のつまらない言いわけに呆れ、顔を歪めて彼は言う。

「それでも、この関係を放ったらかしにしたら、なくなってしまうですよ」

彼は私より年下だ。けれど、普段は敬語なんて使わない。敬語で話をする時は、つまり、怒っている時だ。

「関係、ね」

私は再びコーヒーを啜る。

「なんですか」

私の言葉に彼は噛みつく。相当、頭にきているようだ。それもそうだろう。昨日だけじゃ

なく、私はここ最近、ずっと彼の電話を拒み続けていたのだから。メールだって一通も返していない。彼が「関係」という言葉を出してきたのも、判らなくはない。けれど私は、それがどうしてか悲しかった。

「なにが言いたいんですか」

彼は、答えない私に、いらいらしている。

「なにか頼んだら」

私ははぐらかして、そんなことを言う。

「……………」

彼は納得いかない顔で、しかしここはお店なので、ひとまず私と同じくコーヒーを頼んだ。

私が言いたいののは、こんなことではないのだけど……言葉が出てこない。私たちは、本当にだめなのかもしれない。お互いの気持ちだが、全然判らない。

「どうして、こうなっちゃったんですか……」

「君は、私に訊くばかりだよ。全部いけないのは私だったのかな」

「僕の電話も取らないで、話し合いもしないで、そんなことが、よく言えますね」

彼は傷ついたような顔でこちらを見る。彼の言う通りだ。私は、彼との関係を維持し続けることに疲れてしまったのだ。傷つけて、傷つけられて、その度にやり直すことが、できなくなってしまう。私は彼との逢瀬にストレスしか感じていない。

今日会って、確信した。

私たちは、このままであることができない。

私は——全てを壊してしまいたいと思った。

私は席を立つ。驚く彼を見下ろして、

「もう、連絡しないで」

と言った。

「どうして」

「君は、私を見ていない。私との関係に執心しているだけなんだよ。未練がましく。でも、

君だけが悪いんじゃない。私も、君が見えない」

私はそのまま逃げるようにお店を出た。

彼は椅子に座ったまま、追いかけてはこなかった。

私の残した、飲みかけのコーヒーを眺めていた。

コーヒーは甘すぎた。

——私たちはお互いを見ていない。

私は君の足下を見て、君もまた私の足下を見ている。

私が向かう場所に近づこうとする。

君が向かう場所に近づこうとする。

だけど、隣と一緒に歩くことは、きっと、もうない。

——私たちはお互いを見ていない。

彼は私の自宅を知っているのです、すぐには帰らずに、電車に乗った。追いかけてこなかったのだから、私の家に来ることもないとは思いますが、私自身、家に帰っても落ちつかない気持ちだったのです、どこかで心を静めたかった。

電車内で私はマフラーに顔をうずめて、うつむいていた。この長いマフラーは、彼のために私が編んだものだ。なにぶん初めて作ったものだったので、驚くほどの長さになってしまった。それでも、まあ、当時はこういうマフラーも流行っていたので、そのまま渡す

つもりだったのだけど、直前になつて私は自信がなくて渡せなかった。彼に渡せはしなかったが、このマフラーを一緒に巻いて、並んで歩いたこともあった。今思い出すと、なんとも恥ずかしい話だ。

そうしていると、あとからあとから、彼との思い出が泡のように浮かんできた。私はそれを一つずつ、ぱちん、ぱちん、と割っていく。自分の指先で。ぱちん。ぱちん。彼という存在を、過去のものにしていく。

それにしても、あんなことを言ったわりには、私の心はずいぶんと揺れている。

彼のことを考えるだけで、まだ、胸の中の海は波を起こす。

波が来る度に、そこから思い出の泡が現れる。

でも、もう、これも終わりだ。

私は静かに頬を濡らしながら、ぱちん、ぱちん……と呟いて、電車を降りた。



目的地も決めずに電車に乗って、気まぐれに降りたその駅は、見知らぬところだった。

普段は急行で止まらずに過ぎ去ってしまう駅だ。駅の周りは雑然とした商店街になっている。古いお店がたくさん並んでいる。その街並は、どこか懐かしさを感じさせる、不思議な光景だった。

駅の目の前には、商店街を裂くような一本の小さな坂道があった。駅の目の前にも関わらず、人が全然通らない、薄暗い坂道だった。私はなんとなく、そこに吸い込まれていった。

人が二人並んで歩くのが精一杯の坂道。両脇はお店の壁になっていたが、それもほとんど消えて、木々が変わっていった。この坂道はどうやら、小高い丘を上る道になっているようだった。

太陽は真上に昇り、気温も上がってきた。私はマフラーを外した。夢中で上ってきたが、ふと後ろを振り向くと、駅がずいぶんと小さくなっていった。それなりに上ってきたみたいだ。

私は、この先になにかがある、そう思つて足を進めている。

これを上り切れば、きっと、私は変われる。

そんな——淡い幻想。

そんな——夢い確信。
私は歩く。

不意に、木々の隙間からなかが見えた。黒っぽいなにか。私は逸る気持ちを抑えながら、勾配の緩くなった坂道をそのまま進む。すると、開けた土地に出た。そこには古い、小さな建物が、ぽつねんと存在していた。外からはなんの建物なのか判らない。四角い箱に、球体を一つ上からはめ込んだような外観をしている。球体は上半分が箱の上部から露出していた。近づいていくと、入口を見つけた。そこには看板も置いてあった。

——プラネタリウムだ。

どうやら、もとは子供向けの科学館で、主に天体や宇宙についての展示を行っていたようだ。しかし、おそらくはこも不況の煽りを受けて、今はプラネタリウムを動かすことしかしてはいないらしい。そして、そのプラネタリウムも、もうすぐ処分されるそうだ。

看板には、閉館する旨が書かれた紙が、一枚、そっと貼られていた。

私はもう一度建物を眺めてみる。

古い建物だ。外壁にはいくつかのひびが入っている。長年掃除もしていないのか、屋根

は黒くくすんでしまっている。内部がプラネタリウムになっているのであろう球体部分も、輝きはなかった。昼の光の中、ここだけはなんだか、時間から切り抜かれたように、霞んで見えた。

建物の中に入ってみると、しん、とした冷たい空気が私を出迎えた。薄暗い館内には、私の足音しか聞こえてこない。どことなく図書館を想起させる場所だった。埃と、古い知識の匂いが、むわつと私を包み込んだ。少しむせる。

入口の目の前には受付があり、そこにはおじいさんが一人、座っていた。

「……ようこそ」

しゃがれた声で私に言った。おじいさんの目は細く、しわの隙間からわずかに覗くだけだった。こんなところに女一人で来た私が珍しいのかもしれない。薄くなった白髪頭をゆらゆら揺らしながら、おじいさんは舐めるように私を眺める。それもすぐに飽きたのか、ふいっと視線を外し、

「なにか見るのかい」

と訊いてきた。

「えっと——」

特になにも考えずに入った私は——なぜか人がいるとは思わなかった——、どう答えたものかと悩んだ。

「——プラネタリウム」

そして咄嗟に口をついて出た言葉は、それだった。おじいさんは少し驚いた表情を見せて、それから、

「ごひやくえん」

と、お金を取った。

軋む椅子に腰を預けて、暗い天井を見上げた。私は今、あの球体の中にいる。おじいさんに案内されたそこは、やはり古い匂いがした。私が入った時はほのかに明るかったが、少しずつ照明は落とされていく。視覚が意味を成さなくなる。目を閉じているのか開けているのか、自分では判らない。それとは逆に、聴覚は鋭敏になっていく。静寂が私を包み込む。自分の呼吸音が大きくなる。生きている実感。酸素を消費しているという罪悪感。耳鳴りがする。きいん。空気は縦横無尽に広がり私を抱擁しているはずなのに、イメージは一本の張りつめた糸になる。次に私は自分の身体が震えていることに気づく。なにかを

期待しているのだろうか。恐れているのだろうか。暗闇は人を裸にする。私の感覚は、この身体を離れ始める。他の存在を認識できない時、人は自分の頭の中を世界と認識する。私の世界。私のイメージは、今、この球体の中に広がり続けている。無限に広がる。宇宙のように。不意に孤独を感じる。膨張し続けた私の世界は、そこに私しかないという事実立止まる。泣きそうになる。誰かいないの。誰か、誰か、誰かっ！

——暗闇に、青白い線が走った。

張りつめていた糸が、静かに切られる。私の感覚は身体に戻り、緊張から力の入っていた身体は震えをやめ、少しずつ弛緩していく。耳鳴りは聞こえなくなり、視覚が機能を取り戻す。私は私に帰っていく。

流れ星だ。

私だけの真つ暗な世界だったはずのそこは、いつの間にか幾億もの星々に彩られていた。プラネタリウム自体も古いのか、それは緻密な星を映してはいなかったのかも知れない。しかし、私の心は満たされていった。幾千光年の孤独を越えた星の光が、私に届いている。

相変わらず音はないけれど、なぜか、私は耳元に囁きを聞いた。静かなる会話を交わす。右手を目の前に持つてきて、星と星の間を、指先で結んでみる。星から星へ、ロケットを飛ばすように。

私から君へ飛ばすロケットは、もうないけれど。本当はもう一度、もう一度だけ。

この指先で、君の頬に触れたかった。



翌日。

家を出ると、街には春一番が吹いていた。朝方午前七時の小さな魔法。それはなんだか、まるで世界の始まりを告げているようだった。

そうだ。

今日は散歩に出かけよう。

マフラーは家に置いて、新しい靴でも買いに行こう。

春はもうすぐそこまで来ている。
私は前を向いて歩き出した。

A circular graphic with a blue, textured background. The background is filled with a pattern of white stars and shooting stars, resembling a night sky. The text "pray for you." is written in a white, lowercase, sans-serif font in the center of the circle.

pray for you.